

國學院大學学術情報リポジトリ

オウム真理教をめぐるメディア言説：
一九八九年一〇月のワイドショー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅, 直子, Suga, Naoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000121

オウム真理教をめぐるメディア言説

— 一九八九年一〇月のワイドショー —

菅 直子

一、問題の所在

本論は、一九八九年一〇月放送のワイドショーを事例として、オウム真理教をめぐるマス・メディアの言説を検討する。その目的は、マス・メディアにおいて、宗教団体によって引き起こされた問題が取り上げられながら、「宗教(的)問題」「教義の問題」に関する言説が極めて限定的であることによって、議題設定 (agenda setting) から見失われる問題を捉えることにある。

一九九五年四月から九六年一二月の週刊誌にあるオウム関連

記事^①を分析した池田大臣は、「オウム事件の一連の報道をみていて、まず、気づくことは、オウムに関する事件が宗教問題としてとらえられていないことである」「池田一九九九・一九九」と指摘している。「実際の記事には、宗教的問題としてオウムを分析したものはほとんど皆無」「同・一三〇」であり、「むしろ、「教義の問題」としてとらえることへの強い感情的な反発が存在すると考えた方がよい」「同」という。^②

池田の調査対象は、地下鉄サリン事件発生から麻原逮捕までの過熱報道に始まり、逮捕された教団関係者の供述によって教団内部の惨状が暴露され、いくつかのリンチ事件が発覚し、坂

本弁護士一家の殺害が明らかとなっていく過程で生産され、流通した記事である。オウム真理教は「宗教を利用した犯罪者集団」と捉えられ、教団に内在する問題は、宗教／教義について検討する以前の問題という認識が一般的であり、そのため「教義の問題」として論じることへの感情的な反発が観察されたと考えられる。

しかし、オウム真理教をめぐる「宗教(的)問題」「教義の問題」に関する論議が尽されなかったのは、彼らが「宗教を利用した犯罪者集団」と見做されたため、あるいは「教義の問題」として論じること自体が反感・反発の対象となったから、というだけではない。なぜなら、一九九五年以前のオウム報道においても「宗教(的)問題」「教義の問題」に関する言説は極めて限定的であり、他教団でも同様の傾向が認められるからである。³⁾

本論では、坂本弁護士一家失踪事件報道以前、教団が初めてテレビに登場した一九八九年一〇月時点のマス・メディアの言説を検討する。そこに見出される問題は、オウム真理教に限定されるものではなく、マス・メディアにおける「宗教」をめぐる言説が孕む問題を捉えるものであると考える。

二、分析の対象・方法・視点

一九八九年一〇月二日、『サンデー毎日』(一〇月一五号)が「告発スクープ第一弾!! オウム真理教の狂気」によって「子どもを返せ」という親の訴えとともに教団の「反社会性」を報じると、ワイドショーはこれを後追いした。一〇月六日『おはよう! ナイスデイ』(フジテレビ)が「総力取材! 徹底追跡! オウム真理教」を放送、一日『こんにちは2時』(テレビ朝日)がそれに続いた。⁴⁾ 前者は、取材VTRとスタジオで構成される。後者は「大島渚の熱血生トーク」というコーナーの特別企画として、大島渚を司会に、教祖・麻原彰晃はじめ幹部(石井久子、早川紀代秀、上祐史浩)と、後にオウム真理教被害者の会代表となる永岡弘行による討論形式がとられた。

本論では、麻原が初めてテレビに生出演した一日放送『こんにちは2時』「大島渚の熱血生トーク」(以下「生トーク」)と、一三日放送『おはよう! ナイスデイ』「総力取材! 徹底追跡! オウム真理教 第二弾」(以下「第二弾」)を対象に、番組内の発言(発言・ナレーション)をテキストに書き起こし、テキストの分析を行う。分析には、言説分析および会話分析の手法・知見を参考とした。

言説分析とは、ある社会的出来事や行為、およびその当事者／行為者がテキストによって表象され、同時に定義／意味づけられる過程に注目し、分析するものである。会話分析は、言葉を用いた相互行為を詳細に分析する方法である。テキストによって表象される出来事は、ある特定の歴史的・社会的文脈の中で生じる。ゆえに、テキストが生産・流通・消費される社会の価値（観）の分布が想定され、支配的価値観とテキストとの関連について考察を行うことができる。

ところで、オウム真理教はとりわけテレビ取材に積極的である点で特異な教団であった。激しい抗議もすれば、番組で取り上げてくれるよう「企画」を持ち込むこともあった。TBS問題の端緒となった「水中クンパカ」の取材は、麻原の超能力を証明する、と教団が放送・出版各社に売り込んで行なったデモンストレーションであったことは周知のとおりである。

一九九五年において、一連のオウム報道に対して「報道の『過剰感』や、ニュースの『ワイドショー的』な取り上げ方に疑問や批判を抱く人も少なくなかった」[日本民間放送連盟二〇〇一・三二九]が、そもそもオウム真理教そのものが『ワイドショー的』な取り上げ方（演出）に適うように振る舞う教団であったことも事実である。

文脈は異なるが、大塚英志はオウム騒動以降の言論の混迷を以下のように論じた。

（略）子供たちがTVゲームの中の「虚構」と、自分たちの生きる「現実」の区別がなくなっただんごとくということではない。このレベルに於いての虚実の境界線喪失論は今日まで続いているが、問題はそうではなく、それまで「現実」を構成してきた領域と「虚構」を構成してきた領域の言語上のゆらぎが八〇年代末の段階で確実に始まっていたということである。（略）こういった言語空間の変容を象徴するのが「ワイドショー」であった、といえる。「ワイドショー」とは、それまで現実を記述するために用いられてきたことばや枠組みに従って事件を捕捉するのではなく、「虚構」の力に無根拠に「現実」をゆだねってしまった結果、起きた社会現象である。[大塚一九九六・二四六]

大塚のいう言語空間の変容を、本論ではマス・コミュニケーションの〈ワイドショー化〉と捉える。〈ワイドショー化〉とは、事実を速やかに伝えるためにはなく、受け手が望むであろうと送り手が予想するメディア・フレーム（ストーリー）に

よって出来事・事件が伝えられ、なおかつ、受け手が送り手によって事実が加工・変形されたストーリーを提供されていると認識している事態をいう。〈ワイドショー化〉したマス・コミュニケーションでは、受け手においても送り手においても、メディア・フレームが意識され、メディアの言説に対する先入観や不信感が生じやすいと考えられる。

八〇年代末から九〇年代の初め、「ワイドショー的な語り」を受け手は「シャレ」として許容するようになり、〈ワイドショー化〉を進展させる一方、メディアの情報操作を疑う情報操作説や陰謀論・陰謀史観が若者文化に浸透した。一見、相反するメディアへの対応のようでありながら、いずれもメディアの情報操作を「事実」とは見做さない／見做せないという点で同根である。オウム真理教はさまざまな疑惑に対して「情報操作」や「陰謀」を語り、自らが被害者であると主張することを常としたが、「生トーク」では、まさにそうした陰謀論が麻原によって語られている。

また、一九八九年一〇月のオウム真理教をめぐるマス・メディアの言説を検討するにあたり——『サンデー毎日』（一〇月一五日号）が小見出しに「これは「イエスの方舟」とは違う」と付したことに象徴されるように——イエスの方舟事件の

記憶を考慮する必要がある。「生トーク」では、大島がゲストのばばこういちを「それから、こういう宗教というというです、みなさんすぐ思い出されるんじゃないかと思えます。何年前前にイエスの方舟という事件がございました。で、そのときにちようどアフタヌーンショーなんかでイエスの方舟を大変たくさん、詳しく取材なさったばばこういちさんにもいらしていただきました」と紹介しており、イエスの方舟事件が想起されることを想定していたことがわかる。

イエスの方舟をめぐってメディアが伝えた虚像と実像の隔たりは、「（新興）宗教」（淫祠邪教）のメディア・フレームによつて教祖・若い女性・神隠し（失踪）が語られ、ストーリーが増幅されたことによつて生じた側面があり、事件の記憶はマス・メディアによる〈新興宗教バッシング〉というメディア・フレームをとまなう。「第二弾」では、イエスの方舟事件に直接言及することはなかったが、マス・メディアによる〈新興宗教バッシング〉を懸念する発言がなされている。

三、分析

三——一〇月一日放送『ごんには2時』

「生トーク」の前半は、二つのVTR——教団の概要を伝えるVTR1、娘が出家した母親が涙ながらに語るVTR2——に始まり、大島が永岡の話を書く形で、息子が入信して家を出た経緯が語られる。息子が「生前贈与」を願ったことに話題が及ぶと、麻原は唐突に「実はね、大島さん。ここにね、大変なお客さんが来てるんですよ」と拍手を始め、息子とVTR2の娘をスタジオに招き入れた。大島は「永岡さんはあんまり御息が出て来られることに関しては賛成しておられなかったんですけど、まあ、いらしてしまっただけ」と受け入れたが、子どもを出演させないことが、親側が番組に出した出演条件だった。

教団側はこっそりスタジオに子どもたちをもぐり込ませ、彼らは番組の途中でいきなりカメラの前に現われた。永岡さんの息子は、直前まで気づかれないよう女装させていた。突然のことで、カメラマンも慌てたようだ。永岡さんも局のスタッフもあつげにとられているあいだに、出演した子どもたちは、口々に親を非難し、「オウム真理教の素晴らしさ」を語った。〔江川一九九一―一九四―一九五〕

大島は息子に入信動機を問い、息子がこれに答えていくなか

で「昔から父親にある程度の不信感を抱いて」いたと発言したことによって、「親子の断絶」という理解しやすい一つのストーリーが示される結果となった。CM明け、大島は次のように語る。

大島「今日は、でも、ある意味でその宗教っていうのは親から子どもを切り離すってゆうことは一つの大きな要素なんです。たとえばキリスト教やなんかだって、Who's Mother? 母とは何ぞや、ということを経験してキリストは言っているわけけれども、そういう意味ではこういう形になっているのは、決して特別なことでは僕はないと思うんですね。そのこと自体には、僕はあんまり問題はむしろないと思うんだけど、たださっき聞いてて気になるのは、たとえばそのお金の問題ね。やはり宗教というものに関して、ある程度以上お金がかかるということに対しては、ちよっと一般の常識からいうとね、…それをちよっと福永さん説明を…」

大島は、宗教（信仰）によって親から子が引き離されることは他にも例のあることだとし、「決して特別なことではな

い」「あまり問題はむしろない」と語るのだが、言うまでもなく永岡にとつての問題は、息子が自分と異なる宗教（信仰）によつて自分から離れたことではなく、オウム真理教に入信した息子が変貌し、家を出て戻らないことである。しかし、大島はここで、永岡親子とオウム真理教の問題を（親子と宗教（信仰）の問題）に置き換えることによって、小括してしまった。

「生トーク」の後半は、「お金の問題」を追究したい福永レポーターと麻原の舌戦となる。福永は、オウム真理教の修行システムが信者に多額の金銭を要求するものであることを指摘しようと、「血のイニシエーション」を受けた信者が支払った金額を聞き出そうとする。麻原はそれに答えず、激怒する。

麻原「具体的にいくらかかるといふんじゃないですよ。いくらかかる、つまり、どういうことかという、イニシエーションというのがあって、いろいろ講義からすべて含めて一つの修行体系がありまして、それはたとえば理想郷をつくるための資金として使おうと。まずよろしいでしょうか。その中の一つに、血のイニシエーションがあったと。いいですか。それは私の個人のために使ふんじゃないかもしれません。ですから、いくら、お金がいくらなんですかとい

うのは失礼な言い方ですよ、それは、はっきりいうと」

「理想郷をつくるため」としても何故「お布施」が高額なのか——等、さらに問われるべきことが、麻原の怒りと頑な態度によつて問われずにしまった。大島は麻原の怒りを鎮めるように、「じゃ、あのね、お父さんや、あるいは先ほどのお母さんなんかも、つまり親が一番心配してるのは、どうも睡眠も十分にとつてないようだ。食うものもろくに食つてないようだ。体がね、痩せたりということをしごくみなさん、親は心配しているような気がする。そのへんはどうですか？」と話題を変えた。この問いには、修行をしていくと自然と一日一食になるのだという答えが返ってくる。

番組の幕引きに向け、大島がばばにコメントを求めると、ばばは麻原に、尊師としてあなたがもつと穏やかな形で親子のコミュニケーションを取る努力をすべきではないか、と問いかけた。これに麻原は反論する。

麻原「ちよつとよろしいでしょうか、ばばさん。まずですね、出家は先ほども言いました通り四〇〇名ぐらいの人が出家しています。その中で問題が起きているのが一〇組

ぐらいであると。そして、特に子どもたちが不信を持ったのは、子どもたちというのは、その親御さんにとって子どもさんたちが不信を持ったのは、今回のたとえばサンデー毎日にあるように、ウソを、しかも中身を知らないでウソを吹聴して、オウム真理教叩きをなさったと。ここで不信が生じてるわけですよ、結論から言うならば。(以下、略)

(中略)

大島「麻原さん、さっきからあなたしきりにサンデー毎日の言葉を出してらっしゃるけど、何か意図的なものがある」とあなたは感じてらっしゃる？」

麻原「はい、感じています」

大島「何ですかそれは？」

麻原「それは創価学会の機関誌でサンデー毎日があると。そしておそらく石原伸晃氏と創価学会がつながっているんじゃないかと。今、その証拠集めをして、二つ三つの証拠はもう……」

大島「何ですか？石原伸晃氏っていうのは？」

麻原「それは私が今回立候補する東京四区で同じように立候補してらっしゃる石原慎太郎氏の息子さんですね」

大島「麻原さん、今度立候補なさるわけ？」

ばば「それはなぜ立候補されるんですか？」

麻原「それは先ほども言いました、シャンバラ化計画というのがありまして、¹⁰⁾ 実は宗教法人を私たちが認証していただくときに、国会議員の(早川に小声で「誰でしたっけ？名前」／早川「キタガワ」北川石松氏の妨害にあいましてね。先ほど言ったサンデー毎日の呼びかけの平田雅之君という、三四歳の医師の母親の、母親が背景になって、北川石松という副幹事長のね、人の、自民党の妨害にあって、して、で、これはどうしても政治的な力を持たなければ、オウム真理教やっていけないんだと」

大島「なるほど、わかりました。今お話を聞いててもさっきから僕が言ってますように、宗教の中にいる人間と外にいる人間はなかなかこうね、一致できないんだけれども……」

大島は、「何か意図的なものがあると、あなたは感じてらっしゃる？」と問いかけた——何が「捏造」で、どこに「ウソ」があるのか、とは問わなかった。麻原は『サンデー毎日』の報道は「捏造」「ウソ」「オウム真理教叩き」と繰り返し、テクストに書き起こしてみれば明らかなのに、記事内容の何が

「捏造」なり「ウソ」であるか、具体的に語ることは一切していない。大島は、麻原が「ウソ」だと主張する内容は、記述の正誤の問題ではなく、「宗教」の中／外での認識の違いによって生じたものと解釈したのだろう。

この問いに対して、麻原は創価学会と石原伸晃による陰謀をはのめかす。事実無根の中傷なのだが、さらに選挙出馬、北川石松／自民党の妨害が語られ、これら発言の虚偽が明示されないまま、番組は放送終了時間を迎えた。大島は口早に「なるほど、わかりました」と言って麻原の言葉を切り、「宗教の中にいる人間と外にいる人間はなかなかこうね、一致できないんだけれども」と言う。それは司会者である大島が示した、この討論の結論という印象を与える。

「宗教」の中／外では認識・価値観が異なり、コミュニケーションが困難と感じられるにせよ、不能というわけではない。認識・価値観が異なるならば、なおさら一致できない部分や問題の所在を明らかにしていかなければならない。しかし「生トーク」は、オウム真理教の修行システム・出家制度について問い質そうとしながら、結局のところ何ひとつ追及することができなかった。

三二 一〇月一三日放送『おはよう！ナイスデイ』

「第二弾」はVTR1-6によって取材内容が伝えられる。VTR1は、三〇代の娘が三歳の孫を連れて出家したという夫婦の孫を案じる悲痛な訴えである。VTR2は父子そろって入信した親子のインタビュ、VTR3は永岡親子へのインタビュ、VTR4は弁護士による親権および監護権の説明、VTR5は「血のイニシエーション」に参加した元信者の証言、VTR6はVTR5の証言に疑義を呈する教団幹部（上祐・早川）の主張となっている。

表一は、以上の取材VTRがすべて放送された後、MCが二人のコメントーターに感想を求めたスタジオトーク部分のトランスクリプトである。ただし、記述を簡潔にするため、音声的特徴を示す記号は省略した。

コメントを求められた清水アキラは、間髪を入れず発言02しながら、途中、言葉を選びつつ「切っても切れない縁だと思っんですよ」と言う。「うん」と大きく頷く。続く会話と重なってはいないが、会話の終了を確認する間のないアシスタントの発言03は、清水を「支援」するための「介入」と観察される。また、MCの発言05「清水さんも三人のお子さんの父親でいらっしやいますからね」は、清水を父親とカテゴリーすることで、

父親の意見を代表するものとして呈示する発言となっている。

表一 一九八九年一〇月一三日放送

フジテレビ『おはよう！ナイスデイ』『スタジオトーク』

07 M C	06 ビー コ	05 M C	04 清 水	03 A	02 清 水	01 M C
「『未成年者が含まれている…』	私はとっても今困難だと思います、こういうのって。ていうのは、なぜかかっていうと宗教っていうのはね、信じる人が極楽、(てか) 幸せになりたいために入るんで、それを親子とはいえね、誰かがなっちゃいけないとか、好きになっちゃったみたいなんだから、それを一生懸命引き戻そうっていうのは、とてもね、未成年じゃない限り、とっても難しいと「思うんですね。」	ビーコさん、いかがでしたか？	清水さんも三人のお子さんの父親でいらっしやいますからね。	うん。	「ホントの幸せではないんじゃないか…」	なるほど。というのが今日お伝えする第二弾の全容だったわけなんです、清水さん、ビーコさん、どういうふうにご覧になったでしょうね？ まず清水さんから

17 ビー コ	16 清 水	15 M C	14 清 水	13 A	12 ビー コ	11 M C	10 ビー コ	09 M C	08 ビー コ
子どもに、親があんなこと言ったって、聞くと思えない、私。	ただ、成人しちゃった子どもに、あんなに親がいろんなこと。成人しちゃってるのよ、もう。判断がでちゃうっていう	やっぱり嫌ですね。	どうして	ウチなんか、宗教の自由って言っても、子どもがたとえば、もしあれをやろうとしたら、やっぱり私もあの親と一緒にのうに、ダメだっと思っていますね、うん。	「自主的にいった…」	ただ、あんまりワイワイその宗教のことで、連れ去られたわけじゃないから、未成年以外の場合は「自主的に行ったことだから」、ちょっとどうなんだろうね、難しいですね。	(うーん)	そりや、一生懸命になってそのご当人は血でもなんでも飲むでしよう、私そう思います。それがなんとかって言われても困っちゃうけど、でもそのあたりがね、宗教ってのはみんなが幸せになんないやいけないんだつたら、その人ただだけが幸せじゃなくて周りも幸せにできるということを考えないといけないから、ちょっとねえ、と思いが今見てましたけど	「『未成年者が』いるということは別にしてもね。ちょっとだからそのあたりが、あの、全部がこういうふうやっておっかけていうて悪い悪いっていうふうになっちゃやうと、宗教の自由ってのがちよつとまた変わってきちゃう。それからもう一つは、ホントは宗教ってね、幸せになんないやいけないから、家族とか周りが不幸せになるようなことをさせないことが宗教なんだと私は思ってるから

18	清水	ああ、それはそうですね。
19	M C	ですから、子どもが成人している場合はたしかにそうなんです が、未成年者も相当数いるという部分は大きな問題だろうと思 うんですね
20	ピーコ	そのあたりが一番ね、だから（一）
21	M C	金曜ナイスデイではこのあとオウム真理教については取材を 続けまして、できましたら来週第3弾をお送りする予定です。

記号凡例：「（一）」は前後で会話が重なっている部分 ・（一）内は言語以外の
発声に類するもの ・＝は直前の会話と間髪を入れずに次の会話
が始まったことを示す ・（一）は沈黙を示す

06・07・08は、「未成年者」の語が三回続く。06「未成年
じゃない限り」をとらえて、MCは会話に介入している。会話
分析の知見では、一度に一人の人が話すことが優先され、複数
の人間が同時に話すことを回避する活動が行われていることが
一般に観察されている。また、積極的に介入を行う場面も観察
されるが、それは相手が言いよんでいるときに「支援」した
り、一つの文章を協同で作成して「共感」を示したり、同じ結
語を同時に言うことで「合意」を示したりするなど、その場面
で意味を持つ活動を行っているものとして観察される。つま
り、あえて介入を行うということは、そこに何がしかの場面的
な意味があることを呈示することになるのである。07の介入は

06の発言に対し、しかしながらオウム真理教の入信者・出家者
には未成年者が含まれているのだということを問題提起しよう
とした発言であり、08のさらなる介入は発言者（ピーコ）が未
成年者の問題を認識していることを示そうとしたものと観察さ
れる。

MCは、視聴者に「宗教」への不信感があることを想定し、
また「信教の自由」の遵守を念頭に置き、スタジオトークをデ
ザインしていると思われる。例えば、先の発言05は、「父親」
の意見と言いつ直すことによって、清水がただ「宗教」に不信感
を示しているのではないとフォローしているとも解釈できる。

また、清水が発言14で示したオウム真理教への嫌悪／親への共
感に対し、MCの15「どうして」は語尾を上げておらず、疑問
や反感を示すのではなく、次の言葉を促している。16「やつぱ
り嫌ですね」という発言をピーコが引き取ったため、MCが清
水に何を期待したのかはわからないが、単なる否定に終始する
ことは回避されている。

MCの発言19は、後半の会話を集約し、未成年の入信者・出
家者の存在は問われるべき問題であることを言明している。こ
れはスタジオトークの結論であると同時に、番組がオウム真理
教を取材するスタンスを表明するものと受け取れる。

「第二弾」は、未成年の入信者・出家者の存在を問題として呈示し得たといえる。ただし、アヴァンのナレーションは「超能力を売り物にし、地球破滅の救済を教義とするオウム真理教のねらいは何か。教祖麻原彰晃氏のねらいは何か」と問い掛けており、オウム真理教の超能力開発も問題視していたことがわかる。しかし、超能力開発については問題を呈示するに至れなかった。

その原因として、オウム真理教側の反論・偽証の影響は大きい。VTR5で元信者は、「実際に血を飲むともっとすごい体験ができるんじゃないか」と期待して一〇〇万円を支払ってイニシエーションに参加し、その血を飲んだが、効果が感じられず後悔した、と語った。番組がこの証言から何を伝えようとしたのか、VTR6のオウム真理教による反論——この元信者はニセモノではないか、と疑問点を数々挙げる——が入り込み、その意図がはつきりしない。加えて「(教祖の) 生き血を飲む」という文言は、いかにも「ワイドショー的」なセンセーショナルリズムを思わせる。そのため、番組が「血のイニシエーション」を取り上げたのは、視聴者の興味を引きつけるためではないか、という印象を与える。発言10は、この印象にもとづいているといえる。

「第二弾」は、「血のイニシエーション」によってオウム真理教の超能力開発について問題提起しようとしたようだが、VTR5・6は「生き血を飲む」行為の是非を争点とした意見を引き出す結果となった。

四、考察 — 錯綜するメディア・フレーム —

「生トーク」「第二弾」において、オウム真理教に内在する問題として呈示し得たのは、未成年の入信者・出家者の存在であった。両番組ともオウム真理教の修行システム（「出家（制度）」「お布施」「血のイニシエーション」）を取り上げながら、その他の問題点を指摘するに至れなかった。この帰結に導いた論理は、「信者の意志」の尊重——個人の思想・信条は自由であるから、信者が自主的に行っている事柄を一般常識から逸脱しているという理由だけで批難・否定してはならない——である。未成年の入信者・出家者は問題であると言明されるのは、「信者の意志」（自己の判断）ではない可能性が考えられるからである。

ワイドショーが「信者の意志」の尊重に拘泥したことは、批判の立脚点を明示できなかったことと連関する。ワイドショー

に先行した『サンデー毎日』は、「信教の自由」は尊重されるべきだが、それは「公共の福祉」という前提に立つべきものだとの立場から」『サンデー毎日』一九八九年一月五日号…三〇「七回にわたる集中連載を敢行した。批判の立脚点を明示した『サンデー毎日』と対照すれば、ワイドショーの批判の立脚点（番組の意図）は明示的ではなかった。「生トーク」では、番組冒頭にMCが次のように言う。「新興宗教のオウム真理教。はじめて耳になさる方が多いんじゃないかと思うんですけども、そのオウム真理教に自分の子どもを奪われたと訴える親御さんがいらっしゃいます。それで、今日はですね、このスタジオにその親御さんと、そしてオウム真理教の麻原教祖に来ていただきまして、トークをしたいと思います」と、対立する当事者同士の話し合いであることが説明されるものの、番組の意図するものは何か、トークのテーマは何か、明示していなかった。前節に見たとおり、批判の立脚点が曖昧であるとき、オウム真理教に内在する問題を追及するはずが、「宗教」と社会（世間、一般常識）の軋轢という構図で争点が形成され、オウム真理教にある固有の問題は見失われることになる。

では、ワイドショーが『サンデー毎日』と同じ批判の立脚点から報道すれば、オウム真理教に内在する問題を追及できた

ろうか——当時の〈ワイドショー化〉したマス・コミュニケーションでは、ワイドショーの〈新興宗教バッシング〉と捉えられ、番組が送出する情報に対して、視聴者は少なからず不信感や反感を抱いたのではないかと推察する。『サンデー毎日』の集中連載にしても、中沢新一による批判があった。

オウム真理教は『サンデー毎日』がスクープしたんだけど、こういうものを血祭りにあげていく、あげ方がどうも時代錯誤で気に入らないね。（略）そりゃ、オウム真理教は反社会的かもしれないけど、あらゆる宗教で、反社会的でない宗教なんてあり得ないんだよね。（略）女性週刊誌でさ、姑にミミズのスパゲッティを食わせた嫁とか、あれと同じだよ。（略）猟奇的なものと宗教が同じにされちゃってる、そういうトリックでしょ。『CREA』一九八九年二月号…二六・二七」

マス・メディアが公共の秩序・福祉の観点から「（新興）宗教」の「反社会性」を訴える批判キャンペーンは、明治中期の蓮門教以来繰り返されてきた。中沢は『サンデー毎日』の集中連載に「（新興）宗教」（淫祠邪教）のメディア・フレームを見

出し、〈新興宗教バッシング〉と捉えた。そのため、「時代錯誤」と批判し、「猟奇的なもの」で受け手（読者）の関心を引こうとする週刊誌のセンセーショナルリズムと結びつけていく。

他方、『サンデー毎日』編集長・牧太郎は、マス・メディアは宗教団体を批判することをタブー視する傾向があると捉えており、「戦後のタブーに挑戦する連載キャンペーンの第一弾として取り組んだのがオウム真理教だった」（『週刊現代』一九九五年九月一六日号・五二）。牧は「〇〇の自由」という名のもとに、一般常識から考えると行き過ぎの事態が社会の中で進行している。今回の場合は、『信教の自由』のもとならば何が行なわれてもいいのか？ というのが我々の意見です」（『週刊ポスト』一九八九年一〇月二七日号・四六）と語っていた。

また、『サンデー毎日』は集中連載のなかで「教義の問題」には立ち入らなかつた。牧は「教義はそれぞれ、人間の心の問題だから、それが正しいものか、間違っているものかは、誰にもわからない。オウムの教義がいろいろな宗教の寄せ集めであるからといって、一刀両断に間違いと決めつけることはできない」（『しかし「社会性」の問題なら話は別。普通の人間がみて、おかしいと思うのだったら、おかしいと書けばいい』（『週刊現代』一九九五年九月一六日号・五三）と、いわば戦略的に

「教義の問題」を切り離していた。

たしかに、どんな教義も「一刀両断に間違いと決めつけることはできない」。しかし、「教義の問題」には立ち入れないと決めつけてはならない。報道の役目は、可能な限り正確に情報を伝えることである。さまざまな意見や主張が交わされ、争点が目立つ空間を創り出すことが、メディアに求められていたはずである。しかし、〈ワイドショー化〉したマス・コミュニケーションにおいて、メディアの言説は争点を結ぶことなく錯綜し、オウム真理教に内在する問題は不用意に見失われていた。

付記 本論の調査・研究は、公益財団法人国際宗教研究所（宗教情報リサーチセンター（RIRC）が所蔵する映像資料によつて可能となった。貴重な資料の閲覧をご快諾下さった井上順孝先生はじめお世話下さった所員の方々に記してお礼申し上げた。

引用参考文献

池田太臣（一九九九）「闇」の解説―雑誌報道のなかの「オウム真理教」

『文化学年報』神戸大学大学院文化科学研究科
井上順孝・中牧弘充・孝本貢・西山茂・対馬路人編（一九九〇）『新宗教事
典』弘文堂

大石裕（二〇〇五）『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房

江川紹子（一九九二）『救世主の野望』教育史料出版会

田原茂行（一九九六）『TBSの悲劇はなぜ起こったか』草思社

日本民間放送連盟（二〇〇二）『民間放送五〇年史』日本民間放送連盟

大塚英志（一九九六）『オウムがサブカルチャーを殺した』『諸君』一九九
六年七月号

赤坂憲雄（一九九二）『新編 排除の現象学』筑摩書房

宗教情報リサーチセンター編（二〇一一）『情報時代のオウム真理教』春秋
社

伊藤守（二〇一一）『ドキュメント テレビは原発事故をどう伝えたのか』
平凡社

註

(1) 調査対象は、一般週刊誌七誌（『週刊文春』『週刊朝日』『サンデー毎
日』『週刊読売』『週刊現代』『週刊ポスト』）に掲載された二五二〇件。

(2) 証左として、池田は産経新聞夕刊「宗教・こころ」欄に掲載された吉
本隆明のインタビュー（一九九五年九月五日から四回連載）を挙げ
る。その内容は、麻原の犯罪は否定するものの、宗教家としての才を
高く評価するものであった。この記事に対する反応は、ほとんどがそ
ういった記事を載せた産経に対する抗議であった。〔池田一九九九…
一五八〕

(3) 大宅壮一文庫が所蔵する一九四五・八七年発行の雑誌を対象に、約二
〇〇〇件の新宗教関係記事を調査した井上順孝は「マスコミが新宗教
に抱く興味のあり方は、けっして宗教文化への関心といったような類

のものではない。実態が不明瞭な集団に対する覗き趣味的な関心とで
もいいたものが主流を占める」〔井上一九九〇…五一六〕と指摘して
いる。

(4) なお、九日にはラジオ番組「梶原茂の本気でドンドン」（文化放送）
がオウム真理教の問題を取り上げ、『サンデー毎日』（二〇月二日
号）が「告発スクープ第二弾」を報じている。

(5) 江川によれば、『サンデー毎日』誌上で「血のイニシエーション」の
体験を語った元信者で、「三日放送」おはよう！ナイスデイ」と二〇
日放送「こんにちは2時」の取材に応えた男性は、自宅にいたところ
を教団幹部ら数名に押し入れられ、証言の変更を迫られた。怖くなった
男性は、「証言は事実と反する」という趣旨の文書にサインしたとい
う。教団幹部らはその書面を手にテレビ局に乗り込み、放送の訂正を
迫った。教団の抗議にフジテレビ、テレビ朝日は事実上の訂正放送を
行う。「おはよう！ナイスデイ」「総力取材！徹底追跡！オウム真理
教」は二〇日放送の「第三弾」で幕が引かれるが、「第三弾」はオウ
ム真理教信者（教団に好意的な意見）の取材に重点が置かれ、三日
放送の「こんにちは2時」は約二〇分にわたって麻原の主張を放送し
た。〔江川一九九一…一八八、田原一九九六…四八〕

(6) 一〇月二六日、取材に赴いたのはTBSの報道局と社会情報局の二
チームと、新聞「赤旗」だけだった。取材社が少なかったのは、「す
でに『サンデー毎日』に抗議がおこなわれていたことは、同誌の記事
できりかかされており、（略）三つの民放局（『フジテレビ、テレ
ビ朝日、文化放送』）はすでにそれぞれ抗議を受けて火傷を負ったばか
りの状態で、オウムのお膳立てに多数の社が乗るような状況ではな
かったと推測される」〔田原一九九六…五〇〕。

(7) 例えば「一九九〇年一〇月に熊本県警の強制捜査が始まってから連日
のように朝八時半、午後三時に始まるワイドショーにあわせて記者会
見を行ない、生中継で放送させた。（略）早川紀代秀総務部長と満生

均史渉外部長の二人は、強制捜査当日から姿をくらまし、指名手配となつてから一週間後に熊本地検に出頭した。オウム側は逮捕の前日、フジテレビのなかでも極立ってオウム真理教に好意的なレポーターに、二人を独占インタビューさせ、当日朝のワイドショーに放送させた。続いて逮捕当日の午後三時、麻原はワイドショーの時間に合せて地検に電話を入れ、「これから出頭させます」と予告。番組のスタートと同時にその電話の呼び出し音が入るように計算する演出ぶり。あらかじめ各テレビ局に連絡済み。地検前のカメラの放列のなかを二人の被疑者が到着したところを、熊本県警が逮捕した。出頭したにもかかわらず、逮捕される際もかなり抵抗し、早川総務部長など大袈裟に顔をしかめて「イタイ、イタイ」と大騒ぎ。つき添ってきた女性幹部が「マスコミの皆さん、警察の暴力です」とヒステリックにわめく。このような騒動をテレビに生中継させた（「江川一九九一・一九七―一九八」）

(8) メディア・フレイムとは、出来事の認知・解釈・表象に関する、つまりは選択・強調・排除に関する継続的なパターンである。メディア・フレイムの形成には、出来事やニュースの評価を行う際の基準となる《常識》が行使され、この《常識》は出来事がニュースに変換される過程においては、その物語化を推進する力としてはたらく。（大石二〇〇五・一一六）

(9) 「現代の神隠し」と呼ばれ、若い女性を多数含む総勢二六人の集団が二年余りにわたって逃避行を続けた事件。若い女性に怪しげな呪文を囁きかけ、テント張りの粗末な小屋にひとしい教会にひきずりこみ、やがて神隠しのごとく家族の前から姿を消させる、淫祠邪教の怖ろしい教祖・千石イエス——メディアによって創られた千石の肖像とともに、誘拐・監禁され、性的に蹂躪されるいたいけな良家の女性たちというストーリーが構築され、メディア（サンデー毎日）によって解体された。千石は悩める娘たちにつき合った「ただのおっちゃん」に

すぎず、イエスの方舟は聖書を糧として共同生活をおくる疑似家族的な集団であった。「赤坂一九九一・一〇三―一〇四」
(10) 麻原は「それは先ほども言いました」と前置きしているが、「シャンバラ化計画」という言葉を発しただけで、その内容については放送上まったく言及されていない。

(11) 北川石松がオウム真理教の宗教法人認可に関与した事情については、ほどなく『週刊大衆』十一月六日号と十一月二〇号で報じられる。北川がオウム真理教の認可にあたってはよく調査するよう意見したことを、麻原は「妨害」といつている。